

先進数理科学 幾何

第9回

前回のおさらい

写像 $\nabla : \mathfrak{X}(M) \times \mathfrak{X}(M) \rightarrow \mathfrak{X}(M)$ が以下の (D1), (D2), (D3) を満たすとき ∇ を**接続**, **共変微分**という.

$$(D1) \quad \nabla_{(fV+hW)}X = f\nabla_VX + h\nabla_WX$$

$$(D2) \quad \nabla_V(aX + bY) = a\nabla_VX + b\nabla_VY$$

$$(D3) \quad \nabla_V(fZ) = (Vf)Z + \nabla_VZ$$

接続：ベクトル場を微分するルール

接続 ∇ が**レビチビタ接続**（リーマン接続） $\stackrel{\text{def}}{\iff}$

$$(D4) \quad \nabla_VZ - \nabla_ZV = [V, Z]$$

$$(D5) \quad X\langle V, W \rangle = \langle \nabla_XV, W \rangle + \langle V, \nabla_XW \rangle$$

命題 (Koszul の公式)

写像 ∇ がレビチビタ接続 \iff

$$\begin{aligned} 2\langle \nabla_V W, X \rangle &= V\langle W, X \rangle + W\langle X, V \rangle - X\langle V, W \rangle \\ &\quad - \langle V, [W, X] \rangle + \langle W, [X, V] \rangle + \langle X, [V, W] \rangle \end{aligned}$$

定理

リーマン多様体 (M, g) 上には唯一つのレビチビタ接続が存在する.

- 前回は一意性のみを示していた. レビチビタ接続の存在性を示す際にも「Koszul の公式」を用いる.
- 証明のために, テンソル場の話を紹介.

加群上のテンソル

加群の直積

可換環 R に対して, s 個の R -加群 K_1, \dots, K_s を考える.
このとき集合 $K_1 \times \dots \times K_s$ を

$$K_1 \times \dots \times K_s := \{(v_1, \dots, v_k) \mid v_j \in K_j \ (j = 1, \dots, s)\}$$

と定めると R -加群である.

定義

$K_1 \times \dots \times K_s$ を K_1, \dots, K_s の直積と呼ぶ.

$K_1 = \dots = K_s (= K)$ のとき,

$$K_1 \times \dots \times K_s (= K \times \dots \times K) = K^s$$

と表す.

加群の線形写像

K, L を R -加群とする.

定義

写像 $f : K \rightarrow L$ が

$$\begin{aligned} f(v + w) &= f(v) + f(w) \\ f(rv) &= rf(v) \end{aligned} \quad (\forall v, w \in K, r \in R)$$

を満たすとき, R -線形写像と呼ばれる.

とくに, $L = R$ (係数環) のとき,
 R -線形写像 $f : K \rightarrow R$ を R -線形関数と呼ぶ.

多重線形写像

K_1, \dots, K_s, L を R -加群とする.

定義

写像 $A : K_1 \times \dots \times K_s \rightarrow L$ が R -線形多重写像であるとは,

- 各 $k \in \{1, \dots, s\}$ と,
- 各 $v_j \in K_j$ ($j = 1, \dots, s, j \neq k$)

を固定する毎に定まる写像

$$K_k \ni w \longmapsto A(v_1, \dots, v_{k-1}, w, v_{k+1}, \dots, v_s) \in L$$

が R -線形写像であるときをいう.

双対加群

R -加群 K に対して,

$$K^* := \{f : K \rightarrow R \mid f \text{ は } R\text{-線形}\}$$

もまた R -加群となる.

定義

K^* を K の双対加群という.

テンソル

K を R -加群とする.

定義

自然数 $s, t \in \mathbb{N}$ に対して, R -多重線形写像

$$A : (K^*)^s \times K^t \longrightarrow R$$

を, K 上の (s, t) **型テンソル** と呼ぶ. さらに,

- R -多重線形写像 $A : K^t \rightarrow R$ を $(0, t)$ **型テンソル**, もしくは **共変テンソル** と呼ぶ.
- R -多重線形写像 $A : (K^*)^s \rightarrow R$ を $(s, 0)$ **型テンソル**, もしくは **半変テンソル** と呼ぶ.

$(0, 0)$ 型テンソルは, 単に R の元を表すこととする.

テンソル全体のなす集合

$A, B \in \mathcal{T}_t^s(K)$ と $r \in R$ に対し

$$\begin{aligned}(A + B)(T_1, \dots, T_s, v_1, \dots, v_t) \\ &:= A(T_1, \dots, T_s, v_1, \dots, v_t) + B(T_1, \dots, T_s, v_1, \dots, v_t) \\ (rA)(T_1, \dots, T_s, v_1, \dots, v_t) &:= rA(T_1, \dots, T_s, v_1, \dots, v_t)\end{aligned}$$

により, $A + B, rA$ を定める.

命題

(s, t) 型テンソル全体のなす集合

$$\mathcal{T}_t^s(K) := \{A : (K^*)^s \times K^t \longrightarrow R \mid A \text{ は } R\text{-線形}\}$$

も R -加群である.

多様体上のテンソル場

テンソル場

M を滑らかな多様体とする． 以後， 前述の通り

- 可換環 $R = C^\infty(M)$

$$C^\infty(M) := \{M \text{ 上の滑らかな関数} \}$$

- $C^\infty(M)$ -加群 $K = \mathfrak{X}(M)$

$$\mathfrak{X}(M) := \{M \text{ 上の滑らかなベクトル場} \}$$

とする．

$K = \mathfrak{X}(M)$ の双対加群を $K^* = \mathfrak{X}^*(M)$ で表す． 実は，

$$\mathfrak{X}^*(M) = \Omega^1(M) = \{M \text{ 上の滑らかな 1 次微分形式} \}$$

テンソル場

定義

$C^\infty(M)$ -加群 $\mathfrak{X}(M)$ のテンソルを **テンソル場** と呼ぶ.

- M 上の **(s, t) 型テンソル場** とは,
 $C^\infty(M)$ -多重線形写像のこと:

$$A : \mathfrak{X}^*(M)^s \times \mathfrak{X}(M)^t \longrightarrow C^\infty(M)$$

- (s, t) 型テンソル場全体のなす空間を

$$\mathcal{T}_t^s(M)$$

と表す. $C^\infty(M)$ -加群である.

Remark

(0,0) 型テンソルは係数環 R の元を表すという約束だったので,

$$\mathcal{T}_0^0(M) = C^\infty(M)$$

である.

Remark

$$\mathcal{T}_0^1(M) \cong \mathfrak{X}(M), \quad \mathcal{T}_1^0(M) \cong \Omega^1(M)$$

が成り立つ.

- ここで, \cong は $C^\infty(M)$ -加群としての同形を表す.
- とくに, 双対加群 $\mathfrak{X}^*(M)$ は $\Omega^1(M)$ に $C^\infty(M)$ -加群として同形である.

テンソル場の例

$E : \mathfrak{X}^*(M) \times \mathfrak{X}(M) \longrightarrow C^\infty(M)$ を

$$E(\theta, X) := \theta(X) \quad (\theta \in \mathfrak{X}^*(M), X \in \mathfrak{X}(M))$$

と定め、評価関数と呼ぶ。評価関数 E は $C^\infty(M)$ -線形である。

$$\left[\begin{array}{l} \text{【証明】 } \theta, \omega \in \mathfrak{X}^*(M), X, Y \in \mathfrak{X}(M), f \in C^\infty(M) \text{ とする.} \\ E(\theta + \omega, X) = (\theta + \omega)(X) = \theta(X) + \omega(X) = E(\theta, X) + E(\omega, X) \\ E(\theta, X + Y) = \theta(X + Y) = \theta(X) + \theta(Y) = E(\theta, X) + E(\theta, Y) \\ E(f\theta, X) = (f\theta)(X) = f\theta(X) = f E(\theta, X) \\ E(\theta, fX) = \theta(fX) = f\theta(X) = f E(\theta, X) \end{array} \right]$$

したがって、評価関数 E は $(1, 1)$ 型テンソル場である。

テンソル場でない例

0でない滑らかな1次微分形式 $\omega \in \Omega^1(M)$ を1つとる.
 $F : \mathfrak{X}(M) \times \mathfrak{X}(M) \longrightarrow C^\infty(M)$ を

$$F(X, Y) := X(\omega Y) \quad (X, Y \in \mathfrak{X}(M))$$

と定めると, F は $C^\infty(M)$ -線形でない.
実際, $f \in C^\infty(M)$ とするとき

$$\begin{aligned} F(X, fY) &= X(\omega(fY)) \\ &= X(f\omega Y) \\ &= (Xf)\omega Y + fX(\omega Y) \neq fF(X, Y) \end{aligned}$$

となる. とくに, F はテンソル場ではない.

問 1 (M, g) をリーマン多様体, ∇ を接続とする.

$$A(X, Y, Z) := \langle \nabla_X Y, Z \rangle \quad (X, Y, Z \in \mathfrak{X}(M))$$

で定まる写像 $A : \mathfrak{X}(M) \times \mathfrak{X}(M) \times \mathfrak{X}(M) \rightarrow C^\infty(M)$ はテンソル場かどうか.

問 2 $\theta, \omega \in \Omega^1(M)$ とする.

$$(\theta \otimes \omega)(X, Y) := \theta(X)\omega(Y) \quad (X, Y \in \mathfrak{X}(M))$$

で定まる写像 $\theta \otimes \omega : \mathfrak{X}(M) \times \mathfrak{X}(M) \rightarrow C^\infty(M)$ はテンソル場かどうか.

$C^\infty(M)$ -線形写像 $\alpha : \mathfrak{X}(M) \rightarrow \mathfrak{X}(M)$ の全体

$$\text{Hom}(\mathfrak{X}(M), \mathfrak{X}(M))$$

$$= \{ \alpha : \mathfrak{X}(M) \rightarrow \mathfrak{X}(M) \mid C^\infty(M)\text{-線形写像} \}$$

は $(1, 1)$ -テンソル場全体 $\mathcal{T}_1^1(M)$ と同型：

$$\text{Hom}(\mathfrak{X}(M), \mathfrak{X}(M)) \cong \mathcal{T}_1^1(M)$$

$\alpha \in \text{Hom}(\mathfrak{X}(M), \mathfrak{X}(M))$ に対して
 $A_\alpha : \mathfrak{X}^*(M) \times \mathfrak{X}(M) \rightarrow C^\infty(M)$ を

$$A_\alpha(\theta, X) := \theta(\alpha(X))$$

と定めると, $A_\alpha \in \mathcal{T}_1^1(M)$. これが同型写像を与える：

$$\text{Hom}(\mathfrak{X}(M), \mathfrak{X}(M)) \ni \alpha \mapsto A_\alpha \in \mathcal{T}_1^1(M)$$

多重線形写像に対しても同様のことが成り立つ：

$C^\infty(M)$ -多重線形写像 $\alpha : \mathfrak{X}(M)^t \rightarrow \mathfrak{X}(M)^s$ の全体

$$\text{Hom}(\mathfrak{X}(M)^t, \mathfrak{X}(M)^s)$$

$$= \left\{ \alpha : \mathfrak{X}(M)^t \rightarrow \mathfrak{X}(M)^s \mid C^\infty(M)\text{-多重線形写像} \right\}$$

は (s, t) -テンソル場全体 $\mathcal{T}_t^s(M)$ と同型：

$$\text{Hom}(\mathfrak{X}(M)^t, \mathfrak{X}(M)^s) \cong \mathcal{T}_t^s(M)$$

各点におけるテンソル場

各点でのテンソルとテンソル場

問い

なぜ $C^\infty(M)$ -線形性が必要なのか

へのひとつの答えを与える：

- テンソル場 A に対して,
- 1 次微分形式とベクトル場を与えると定まる関数

$$A(\theta^1, \dots, \theta^s, X_1, \dots, X_t) : M \rightarrow \mathbb{R}$$

は、各 1 次微分形式やベクトル場に依存しているわけではなく、ただ単に**その点 $p \in M$ にのみ依存している**ということである。

示したいこと

- (s, t) 型テンソル場 $A \in \mathcal{T}_t^s(M)$
- 1 次微分形式 $\theta^1, \dots, \theta^s, \bar{\theta}^1, \dots, \bar{\theta}^s \in \Omega^1(M)$
- ベクトル場 $X_1, \dots, X_t, \bar{X}_1, \dots, \bar{X}_t \in \mathfrak{X}(M)$

とする.

定理 7

もし, 点 $p \in M$ において, $\forall i \in \{1, \dots, s\}, \forall j \in \{1, \dots, t\}$ に対して

$$\theta^i|_p = \bar{\theta}^i|_p, \quad X_j|_p = \bar{X}_j|_p$$

が成り立つならば,

$$A(\theta^1, \dots, \theta^s, X_1, \dots, X_t)(p) = A(\bar{\theta}^1, \dots, \bar{\theta}^s, \bar{X}_1, \dots, \bar{X}_t)(p).$$

定理7より, (s, t) 型テンソル場は, 1 次微分形式 $\theta^1, \dots, \theta^s, \bar{\theta}^1, \dots, \bar{\theta}^s \in \Omega^1(M)$ やベクトル場 $X_1, \dots, X_t, \bar{X}_1, \dots, \bar{X}_t \in \mathfrak{X}(M)$ に依存するわけではなく, **それらの点 $p \in M$ での値のみに依存する.**
 まとめると, 次を得る.

系8

(s, t) 型テンソル場 $A \in \mathcal{T}_t^s(M)$ に対して, 各点 $p \in M$ において多重線形写像 $A_p : (T_p^*M)^s \times (T_pM)^t \rightarrow \mathbb{R}$ を

$$A_p(\alpha^1, \dots, \alpha^s, \nu_1, \dots, \nu_t) := A(\theta^1, \dots, \theta^s, X_1, \dots, X_t)(p) \\
 (\alpha^1, \dots, \alpha^s \in T_p^*M, \quad \nu_1, \dots, \nu_t \in T_pM)$$

ただし, $\theta^i \in \Omega^1(M)$, $X_j \in \mathfrak{X}(M)$ は $(\theta^i)_p = \alpha^i$, $(X_j)_p = \nu_j$ を満たすような拡張とする.

テンソル場が各点における テンソルを定めること

証明のために、次の補題を用意する。

補題 11

点 $p \in M$ と、その開近傍 U を任意に与えたとする。

$\implies \exists V : p$ の開近傍, $\exists f : M \rightarrow \mathbb{R} : C^\infty$ 級関数 s.t.

$$\bar{V} \subset U, \quad \text{かつ} \quad \begin{cases} f(q) = 1 & (\forall q \in \bar{V}) \\ 0 \leq f(q) < 1 & (\forall q \in U - \bar{V}) \\ f(q) = 0 & (\forall q \in M - U) \end{cases}$$

ただし、 \bar{V} は V の閉包である。

補題 11 の証明は、『多様体の基礎』(松本幸夫著, 東京大学出版) の命題 13.11 を参照のこと。

補題 11 の証明は、『多様体の基礎』(松本幸夫著, 東京大学出版) の命題 13.11 を参照のこと.

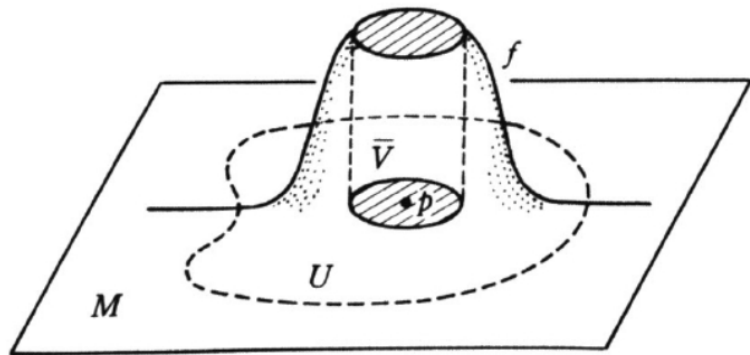


Figure: 補題 11 の C^∞ 級関数 $f : M \rightarrow \mathbb{R}$. 『多様体の基礎』(松本幸夫著, 東京大学出版) の図 13.8

補題 12

$\theta^1, \dots, \theta^s \in \Omega^1(M)$, $X_1, \dots, X_t \in \mathfrak{X}(M)$ が
 $p \in M$ においてどれか 1 つでも 0 ならば,

$$A(\theta^1, \dots, \theta^s, X_1, \dots, X_t)(p) = 0.$$

$s = t = 1$ の場合を示そう.

$X_p = \mathbf{0}$ のとき, $A(\theta, X)(p) = 0$ を示す.

p の座標近傍 (U, x^1, \dots, x^m) において, C^∞ 級関数 $X^1, \dots, X^m \in C^\infty(U)$ を用いて

$$X = \sum_{i=1}^m X^i \partial_i$$

と表される.

$f : M \rightarrow \mathbb{R}$ を補題 11 の関数とすると、
各 $i = 1, \dots, m$ に対して

- fX^i は M 全体で定義された C^∞ 級関数,
- $f\partial_i$ は M 全体で定義された C^∞ 級ベクトル場である。したがって

$$f^2 A(\theta, X) = A(\theta, f^2 X) = A\left(\theta, \sum_{i=1}^m fX^i f\partial_i\right) = \sum_{i=1}^m fX^i A(\theta, f\partial_i)$$

と変形されるため、 p において

$$f(p)^2 A(\theta, X)(p) = \sum_{i=1}^m (fX^i)(p) A(\theta, f\partial_i)(p)$$

となる。

p において

$$f(p)^2 A(\theta, X)(p) = \sum_{i=1}^m (fX^i)(p) A(\theta, f\partial_i)(p) \quad (1)$$

となる.

ここで, $f(p) = 1$ であり, また $X_p = \mathbf{0}$ より

$$X^1(p) = \cdots = X^m(p) = 0$$

なので, 各 $i = 1, \dots, m$ に対して

$$(fX^i)(p) = f(p) X^i(p) = 0$$

が成り立つ. よって (1) より $A(\theta, X)(p) = 0$ を得る.

示したいこと

- (s, t) 型テンソル場 $A \in \mathcal{T}_t^s(M)$
- 1 次微分形式 $\theta^1, \dots, \theta^s, \bar{\theta}^1, \dots, \bar{\theta}^s \in \Omega^1(M)$
- ベクトル場 $X_1, \dots, X_t, \bar{X}_1, \dots, \bar{X}_t \in \mathfrak{X}(M)$

とする.

定理 7

もし, 点 $p \in M$ において, $\forall i \in \{1, \dots, s\}, \forall j \in \{1, \dots, t\}$ に対して

$$\theta^i|_p = \bar{\theta}^i|_p, \quad X_j|_p = \bar{X}_j|_p$$

が成り立つならば,

$$A(\theta^1, \dots, \theta^s, X_1, \dots, X_t)(p) = A(\bar{\theta}^1, \dots, \bar{\theta}^s, \bar{X}_1, \dots, \bar{X}_t)(p).$$

定理7の証明

$s = 1, t = 2$ の場合を示してみよう.

- $\theta, \bar{\theta} \in \Omega^1(M),$
- $X, Y, \bar{X}, \bar{Y} \in \mathfrak{X}(M)$

に対し,

$$\theta|_p = \bar{\theta}|_p, \quad X|_p = \bar{X}|_p, \quad Y|_p = \bar{Y}|_p$$

を満たすとするとき,

$$A(\theta, X, Y)(p) = A(\bar{\theta}, \bar{X}, \bar{Y})(p)$$

となることを示そう.

$A(\theta, X, Y) - A(\bar{\theta}, X, Y) = A(\theta - \bar{\theta}, X, Y)$ などの多重線形性を用いる：

$$\begin{aligned} & A(\theta, X, Y) - A(\bar{\theta}, \bar{X}, \bar{Y}) \\ &= A(\theta - \bar{\theta}, X, Y) + A(\bar{\theta}, X, Y) - A(\bar{\theta}, \bar{X}, \bar{Y}) \\ &= A(\theta - \bar{\theta}, X, Y) + A(\bar{\theta}, X - \bar{X}, Y) + A(\bar{\theta}, \bar{X}, Y) - A(\bar{\theta}, \bar{X}, \bar{Y}) \\ &= A(\theta - \bar{\theta}, X, Y) + A(\bar{\theta}, X - \bar{X}, Y) + A(\bar{\theta}, \bar{X}, Y - \bar{Y}) \end{aligned}$$

なので，補題 12 より

$$A(\theta, X, Y)(p) - A(\bar{\theta}, \bar{X}, \bar{Y})(p) = 0$$

が成り立つことがわかる．

同様に，一般の s, t に対しても同様に示すことができる．

レビチビタ接続の存在性の証明

補題 9

任意の 1 次微分形式 $\theta \in \Omega^1(M)$ に対して, ベクトル場 $V \in \mathfrak{X}(M)$ が存在して次のように表される:

$$\theta(X) = \langle V, X \rangle \quad (X \in \mathfrak{X}(M))$$

証明. 各座標近傍 $(U; x^1, \dots, x^m)$ において示せば良い.
行列 $G = (g_{ij})_{i,j}$ の逆行列 G^{-1} の (i,j) 成分を g^{ij} と表す.
 U 上で $\theta = \sum_{i=1}^m \theta_i dx^i$ のとき, $V := \sum_{i,j=1}^m g^{ij} \theta_i \partial_j$ とおくと

$$\begin{aligned} \langle V, \partial_k \rangle &= \sum_{i,j=1}^m g^{ij} \theta_i \langle \partial_j, \partial_k \rangle = \sum_{i,j=1}^m \theta_i g^{ij} g_{jk} = \sum_{i=1}^m \theta_i \delta_{ik} = \theta_k \\ &= \theta(\partial_k) \end{aligned}$$

補題 10

ベクトル場 $V, W \in \mathfrak{X}(M)$ に対して, $\theta_{V,W}$ を

$$\begin{aligned}\theta_{V,W}(X) := & \frac{1}{2} (V \langle W, X \rangle + W \langle X, V \rangle - X \langle V, W \rangle \\ & - \langle V, [W, X] \rangle + \langle W, [X, V] \rangle + \langle X, [V, W] \rangle)\end{aligned}$$

と定めると $\theta_{V,W} \in \Omega^1(M)$

証明. 各 C^∞ 級関数 $f \in C^\infty(M)$ に対して

$$\theta_{V,W}(fX) = f \theta_{V,W}(X)$$

を示せば良い. 直接計算でわかる.

定理 3

リーマン多様体 (M, g) 上には唯一つのレビチビタ接続が存在する.

証明. 補題 10 のように $\theta_{V,W} \in \Omega^1(M)$ を定める. 補題 9 より, $Z_{V,W} \in \mathfrak{X}(M)$ で $\langle Z_{V,W}, X \rangle = \theta_{V,W}(X)$ を満たすものが存在する.

$$\begin{aligned}\langle Z_{V,W}, X \rangle &= \frac{1}{2} (V \langle W, X \rangle + W \langle X, V \rangle - X \langle V, W \rangle \\ &\quad - \langle V, [W, X] \rangle + \langle W, [X, V] \rangle + \langle X, [V, W] \rangle)\end{aligned}$$

この $Z_{V,W}$ が (D1), (D2), (D3) を満たすことがわかるので, $\nabla_V W := Z_{V,W}$ は接続である.

まとめ

定理 3

リーマン多様体 (M, g) 上には唯一つのレビチビタ接続が存在する.

- テンソル場 A は, $C^\infty(M)$ -線形性を満たす.
- 1 次微分形式とベクトル場を与えると定まる関数

$$A(\theta^1, \dots, \theta^s, X_1, \dots, X_t) : M \rightarrow \mathbb{R}$$

は, 各 1 次微分形式やベクトル場に依存しているわけではなく, ただ単に**その点 $p \in M$ での値にのみ依存している**.

課題の提出締切: 6月17日(月) 16時